

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.2

学校での勉強だけが学びではありません。
子ども時代だけが学ぶときというわけでもありません。

おとなからも学ぶことができます。
子どもからも学ぶことができます。

ともだちからも学ぶことができます。
自然からも学ぶことができます。

だれもが、自分の知らないこと、
知りたいことを持っています。
だれもが、自分の知っていることを持っています。

知っている人が知りたい人に教えてあげること、
知りたい人が知っている人から学ぶこと、

学んで知ったことを、まただれかに教えてあげよう。
そこでは、みんながせんせいで、みんながせいとです。

さあ、「いつでもがっこう」、「だれでもがっこう」、
「なんでもがっこう」のはじまりです。



雲の便り

『昔子どもだったおとなと
今の子どもと未来の子どものための農業体験』

8月20日、地域の役員たちで、堆肥をすきこんで土作りをし、畝をたてました。

夏休みもほぼ終わりに近づいた8月26日、地域内外の子どもと大人、そして京大とがいっしょに、畑に作付けしました。

この企画は、農作物（そして、そのいのち）が育っていく驚きといのちを育てる労働の喜びを、すべての子どもたちに知ってもらい、この経験を次世代の子どもたちに伝えていければという願いをこめて野殿童仙房生涯学習推進委員会が立案したものです。野菜作りを通じて身近な食生活に親しんでもらうことも目的のひとつです。

その畑で、葉ボタン、キャベツ、ブロッコリの苗を植え、大根、白菜などの種を蒔きました。2日後には早くも種が芽を出し、雨が続いたことも幸いして順調に生長し、9月3日には、1回目の間引きをしました。せっかく植えたのにもったいない、とも思いますが、間引かなければ収穫できないことを考えると、自然の摂理の厳しさ、同時に人間が生きるこの意味に思いが向かいます。

この畑では、農薬等を使う「普通の農業」と、農薬も化学肥料も使わない「自然志向の農業」とをエリアを分けて同時進行させています。農薬が是か非かというような単純な問題ではなく、命とは何なのか、生きるとは何なのかを、大地から学んでいきたいと考えています。



生涯学習委員会畑・植え付け

この秋には収穫した野菜と地元のおいしいお米で、みんなで食事会をすることを楽しみにしています。

なお、当事業は京都府の「地域発未来つ子応援事業」に応募しましたが不採択との通知をいただきました。どこからも資金は出ませんが、それでも是非という、地域と京大の強い意欲によって実現しました。また、大阪の生活協同組合「アルファコープ」も、隣の畑で同じ取り組みをしています。生涯学習の活動の輪が広がることを歓迎いたします。



生涯学習委員会畑・間引き作業

今後の作業日程は以下の通りです。
どなたでも参加していただけます。

- 9月30日(土) 午後1時～
- 10月14日(土) 午後1時～
- 10月28日(土) 午後1時～
- 11月11日(土) 午後1時～
- 11月18日(土) 午後1時～(収穫祭)
- ～19日(日) 午前10時～(秋の祭典の準備)
- 11月23日(木) むら・秋の祭典へ出店

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「フィールド委員会」柴本まで
〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院教育学研究科
TEL:075-753-3030

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄／副会長 西村秀俊

2006年10月31日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科「フィールド委員会」
プロジェクト「フィールドを立ち上げる」
編集：前平泰志
制作：(株)松籟社

公開シンポジウム 「地域を結ぶ・地域を拓く」

夕食後、4人のシンポジストから、野殿・童仙房在住の人たち、小・中学校の先生、学生、アルファコープの関係者などの聴衆を前にして、地域の再生をテーマに、自分たちのいま考えていること、これまでやってきたことなどを自由に語ってもらった。中村富士雄野殿区長は、「野殿童仙房生涯学習推進委員会」の会長をも務める。氏のプロフィールは、「京都新聞」8月3日（木）山城ワイド版に「やましる団塊ストーリー」というシリーズの一編として、同委員会の成立の経緯も絡めながら紹介されている。阪本光代氏はアルファコープの「なつのがっこう」の実行委員長を務める。李 璟瑋氏は、韓国の梨花女子大学で生涯学習を教える。専門は高齢者の教育である。日本語の学習は、NHKの衛星放送を朝夕毎日視聴することで身につけたという。長岡素彦氏は独立のジャーナリスト。このシンポジウムの内容は、インターネットの新聞「JAN JAN」の8月17日版（<http://www.janjan.jp/area/0608/0608149482/1.php>）に氏の署名入りで報道されている。最後に、字数の制約のためにお話内容を一部割愛させていただいたことをお断りしておきたい。



前平泰志

がんばらない、あきらめないまち育て ——持続可能な開発・発展とまち育て 長岡 素彦 Motohiko NAGAOKA

これまで「まちづくり」や「むらおこし」と呼んできたものを、私は教育的な意味を込めて「まち育て」と呼んでいる。単に呼び方を変えたのではなく、これまでの地域開発のやり方に限界が来ているという、私の判断に基づくものである。また、タイトルに「がんばらない、あきらめない……」としたが、「がんばって、あきらめたまちづくり」の典型に夕張市がある。全国の失敗したケースは、ひとことで言えば、20世紀従来型の観光と農業開発による自治体の破綻ということになる。「むすんで」「ひらいて」——そこまでは行くのだけど、ひらいたあとのその手はいったいどこに行くのか？——これが問題なのである。

まちも、人と同じように見立てれば、まちをつくるというより、まちを育てるという視点が必要なのではないだろうか。その意味で、「大学と地域の連携」や「グリーンツーリズム」など今後大いに推奨されてよいプロジェクトだろう。地域再生のためには、これまでよりもっと長い道のりが要求されるだろう。「ゆっくり、ゆっくり」から「長い、長い」地域再生の道りである。そのためには、「がんばらない」と「あきらめない」ことが肝心だ。「がんばらない」とは、効率や経済を優先せずに持続可能な開発をめざすことだ。「あきらめない」というのは、環境総破壊から地域を護りながら、地域再生をおこすことなのである。そのような運動を表すキーワードとして「つなぎなおす」「もやいなおし」という言葉もよく聞かれるようになっている。

最後に、このような地域再生のためには、広い意味での教育が是非とも必要だ。さまざまな世代が力を合わせて取り組んでいく「異世代協働」が必要だろう。また、子どもの未来と地球の未来を「学び合う」ことこそが「まち育て」につながる。まち育てという持続可能な開発のためにも教育、とりわけ生涯教育が求められているように思う。

日本・韓国と私 李 璟瑋 Kyounghee LEE

私は日本の文化が好きです。日本の歌謡曲の歌手もよく知っています。前川清、都はるみ、堀内孝雄は大好きです。それを聞いて幼いときから成長した。吉永小百合も好き。「男はつらいよ」の寅さんも好きです。父が大学時代まで日本で生まれ育ったので、日本のことはよく聞かされて育ちました。

今世界の中で一番重要な問題は、“高齢化”の問題です。韓国でもどんどん高齢化と老人化のことに関心が高い。私の問題関心は、死の教育であります。

韓国でも地域の問題があります。ソウルの真ん中に漢江（ハンガン）という大きな川が流れています。川の北の方と南の方で生活水準が違う。大きな地域の問題です。

その問題とともに、特に教育環境の問題が深刻です。南北で、相当な開きがあります。都市の中でも地域の問題があります。都市と田舎の中でも同じ問題があります。生活環境と電気施設が、都市でも色々と落差がありますが、農村ではそうではないです。特に、老人ケアの問題が一番の問題です。老人の問題は、病気と孤独です。そして、経済的な困難の問題もあります。すなわち、無為の問題もあります。いつかは私たちが老人になります。現在の老人の問題は私たちの問題です。みなさんは、老年期に入って何をしますか、みなさんも一緒にこの問題について考えましょう。



むす ひら 「結んで拓いて」夏期セミナーより

日時：2006年8月10日 20:00～22:00

司会： 前平 泰志（京都大学 教授）

シンポジスト：長岡 素彦（地域情報研究所・ジャーナリスト）

李 璟瑋（梨花女子大学 教授）

中村富士雄（野殿区長）

阪本 光代（アルファコープ：

「なつのがっこう」実行委員長）

（敬称略）

私子どもだった頃

中村 富士雄 Fujio NAKAMURA

昨夜の歓迎会のバーベキューでは、炭で火をおこせない若者たちがいた。私の子どもの頃は、炭火をどのようにおこすか、火種をどのように保存しておくかが、きわめて大切なことであった。食生活についても、卵や鶏肉はどの家も貴重な食材であり、お正月やお盆の際にお客さんが来たときの接待用に使われていた。鶏も調理するのも、勿論各家庭においてである。それは、まず鶏の首を絞めて気絶させ、羽を折る。縄でくくり、つり下げて、首を皮一枚残し切り、しばらく放っておく。そうすると、血が抜ける。毛を抜く。産毛は、藁を燃やす。そこで、産毛を焼いてしまう。それから4つに割って肉にした。魚は干物だけであり、他の肉が見あたらなかったため、鶏の肉はとても貴重であった。

猟の話をしよと思う。ハンターを「マタギ」と呼んでいる。イノシシが田畑を荒らす。イノシシを取る作業。数人のマタギの追い込みで捕る。イノシシを山の中から出す人を「勢子」、それを待つ人を「待ち」と呼んでいる。鉄砲を持っている人のところに追い込むのだ。また、罟猟というものもある。罟をくくる。獣のおへその周りでかかる。それで捕ると、すぐに獲物が死んでしまう。跳棒をかけるから、イノシシの体が浮いてしまう。私は、私の祖父からその猟の仕方を身につけた。獲った獲物の血を早く抜けるかどうかで、新鮮さが違ってくる。それをどうしたらいいか知恵を絞る。先人は、塩と味噌の力でそれを抑える。それで、悪臭が消える。今では、簡単に足をくくり、犬による狩猟、などでイノシシを退治して新鮮な肉を食べられるようになった。

朝鮮半島から来た渡来人から祖先が教えてもらい、代々伝わっているものも少なくない。わが家の自家製の味噌もそのひとつである。私の子どもの時代の話をする中で野殿の生活の一端を知ってもらった。何かの参考になれば幸いです。



なつのがっこうと私たち

阪本 光代 Mitsuyo SAKAMOTO

毎夏、山梨県で「なつのがっこう」を4泊5日で開いている。募集は小学校1年生以上。誰でも受け入れている。およそ50人の子どもと親、スタッフなど計80人くらいが集まる。

子どもたちを中心にして、リーダー（学生のボランティア）と子どもたちを支える側として、私たちスタッフ。子供たちはリーダーに愛称をつけ呼んでいる。それはさながら小さな地域社会である。

いまの子どもは、異年齢集団が固まって遊ぶ習慣がないのではないかとされているように、同学年の子だけと遊ぶ。今、子育てが大変な時代と言われているが、この4泊5日の「がっこう」から学べるものがたくさんあるのではないかと。そう思って続けている。

また、鶏・牛の世話、畑の草引き・収穫・食事作りなどを通して、お互いに小さなことを積み重ねていくことによって、人を信頼していけるのではないかと。わずか5日間の出来事ですが、そのような人と人との信頼を感じていく子どもも多くいる。

そのような経験をもっと多くできないか、近くでできる場所がないか、と探し始めて3年が経過した。野殿・童仙房という地に会って、ここにお世話になろうと考えた。

私たちがこの地区の人たちにどういうことができるかはわからない。私たちが手探りではあるけれどやりたいことを持ってきて通ってみて、そこから地域の人たちと一緒にできることを見つけていきたい。

地域のなかを見させていただいた。都会の子どもたちにとってこのような自然に触れることが、とても大事なことはないかと思う。

「なつのがっこう」では、鶏の解体をしている。世間では賛否両論があるけれど、私たちはいろんな〈いのち〉をいただくことで生きている。〈いのち〉をいただくことの大切さを感じる子どもになることを願っている。

学校の生活では、命の危険に関わる以外、決まりを作っていない。子どもたちに私たちが教えられながら、やってきて10年。これからも子どもたちのためにも、私たちのためにも今後も続けていきたい。よろしくお祈りします。

